

国内経済情勢

概観

設備投資と個人消費を中心に総需要は高いテンポで拡大を続けている。こうした動きを背景に、生産は根強い増加を続け、出荷も基調としてはかなりの増勢を示している。商品市況面では、ここ2、3ヵ月来の地合いにとくに大きな変化はないが、卸売物価は大勢落着きのうちにもやや強含みぎみに推移している。

金融市場では、租税の自然増収や郵便貯金の好伸などから財政資金は多額の揚超を示し、これに銀行券の増勢も加わって引き締まり基調が続いている。全国銀行貸出も6月は前年に比べ大幅に増加した。

国際収支の総合勘定は3月以降連続4ヵ月にわたり大幅逆調を続け、6月には外貨準備も減少した。輸出の伸び悩み傾向がさして改まらない一方、輸入の増勢持続から季節調整後の貿易収支の黒字幅はここ一両月目だって縮小しており、また貿易外収支も悪化の度合いを強めつつあることは注目を要する。

このような情勢にかんがみ、政府は国債、政保債の減額を決定し、本行は市中銀行に対し資金ポジションの指導を強化することとした。

生産、出荷の増勢続く

鉱工業生産(季節調整済み)は、5月に前月比+0.9%増となったあと、6月は速報で+1.9%と相

当な増加を示し、このところかなりの増勢を持続している。当月の動きを財別にみると、一般資本財が電力向け大型機械の反動増から、また輸送用機械が鋼船、トラック等の増産を中心に、それぞれ大幅増加となったほか、耐久消費財(小型四輪車)や生産財(鉄鋼、石油)もかなりの伸びを示した。

鉱工業出荷(季節調整済み)は前月著増のあとをうけ、6月(速報)は前月比+0.7%の小幅増加にとどまった。最近における出荷の動きは月々激しいフレを示しているが、これには電力向け大型機械や鋼船等の急激な増減が大きく響いており、これらの要因を除いてみると、相当高いテンポの増勢が続いている。財別にみると、当月は輸送用機械が著減したほかは軒並み増加したが、とくに一般資本財が相当な増加を示し、耐久消費財も小型四輪車、家庭用電機の出荷増から大幅増加となった。

6月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、今春来やや増加が目だっていた鉄鋼、機械、繊維等を中心に前月比-1.1%と5ヵ月ぶりに減少し、製品在庫率も前月比-1.7%と引き続き低下した。

設備投資は広く各業種にわたって、程度の差こそあれ、かなりのテンポで拡大を続けており、全体としてみると相当な盛り上がりを示している。また、高水準の企業収益を背景に当初の年度間計画を最近増額修正しようとする動きもかなりみられる。先行指標である機械受注(海運を除く民需、

季節調整済み)は、月により大きなうねりをみせつつも引き続き増加傾向をたどっており、機械メーカー筋でも、当面高水準の受注が続くとみる向きが多い。

この間、労働力需給は依然引き締まり基調を続け、賃金も臨時給与を中心に騰勢を強めている。かかる所得の増大傾向は、消費態度の積極化とあいまって個人消費の増勢をこのところ次第に強めており、最近の全国百貨店の売上高をみても、中元関係や夏物商品を中心にかなりの伸びを示している。

卸売物価は大勢落着きのうちにもやや強含みぞみ

最近の商品市況をみると、6月初来条鋼類を中心に反発商状をみせた鉄鋼が再び小幅軟化し、また洋紙、木材等も弱保合いとなった。しかし反面、繊維では、5月央以降訂正安を続けてきた綿糸が下げどまったほか、生糸、スフ糸は一転して急伸し、また非鉄(銅)、砂糖も小反発をみせ、石油もスエズ運河閉鎖に伴うフレート高の影響を受けてこれまでの軟調傾向を改めるなど、強弱区々のうちにもいずれかといえば強含みを示す商品が幾分多かった。

6月の本行卸売物価は、非鉄の反騰や繊維の続伸などから前月比+0.2%と引き続き小幅上昇を示した。7月上旬も前旬比+0.1%と微騰を続け、中旬もその水準で保合うなど大勢落着きのうちにもやや強含み気配をみせている。

他方、消費者物価(東京)は、野菜の大幅値下がりなどから6月は前月比-0.5%、7月も-0.1%と続落し、最近2か月の前年同月比上昇率は2%以下にとどまっている。

金融市場は引き締まり基調

6月の銀行券は、賞与の巨額の支払もあって月中1,833億円(前年1,407億円)の発行超となり、月中平均発行高の前年同月比増加率は+16.4%と5月より水準を高めた。他方、財政資金は、法人税、郵便貯金などの受入れが引き続き好伸したうえ、公共事業関係費の支払が前年水準を下回ったため、月中受超額は1,328億円と前年同月(726億円)を大幅に上回った。このような情勢から市場の資金不足は多額に上り、これに対処して本行は短期証券の買戻しや長期債の買入れを行なったが、金融市場は引き締まりぎみに推移し、コール・レートも月初の月越物に続き、月央には翌日物、無条件物ともそれぞれ日歩1厘上昇した。

更月後も銀行券の根強い増勢基調が続いている一方、財政資金は長期国債の市中消化額(100億円)が前年(200億円)の半ばにとどめられたにもかかわらず、租税を中心に相変わらず引揚げ傾向が強く、このため金融市場は引き締まり基調を続け、下旬にはコール・レートは各条件物ともさらに1厘高となった。なお、政府は7月25日、国債および政保債の本年度市中消化予定額を減額(それぞれ700億円および500億円)することに決定した。

6月の全国銀行勘定をみると、実質預金の月中増加額は1,805億円と前年同月を12%上回ったが、貸出は月中4,538億円増と前年同月を27%上回るかなり大幅の増加を示した。また、中小企業金融機関の貸出も前年を20%前後上回る増加となった。このような貸出の増加については、金融機関が預金増強との兼合いで貸し進んだ面も見のがせないが、同時に、企業の借入需要が大企業も含め漸増基調にあることもかなり響いているとみられる。

公社債市況をみると、頃来の市況軟化から都市銀行を中心とする有価証券の売却が、さすがに控え目となっていることもあって、上場相場、店頭気配ともこのところ総じて下げ一服模様となっているが、こうしたなかで国債の相場は需給の実勢を映じ軟化を示している。

国際収支は大幅な赤字基調を持続

6月の国際収支は、貿易収支が季節的事情から前月に比べ好転したにもかかわらず、貿易外収支や資本収支の多額の赤字を補うまでには至らず、結局総合収支では51百万ドルの赤字となり、すでに4ヵ月にわたって大幅な逆調傾向が続いている。

なお、金融勘定では、これまで3ヵ月間為替銀行の短期資産・負債バランスは、借入債務の増加により大幅の悪化を続けた反面、外貨準備は増加したが、6月には前者の悪化の度合いが縮まったのに伴い、外貨準備はついに36百万ドル減少するに至った。

最近における貿易収支の動きを季節調整後で見ると、輸出が総じて伸び悩みぎみに推移している一方、輸入はかなりのテンポで増勢を持続しているため、ここ一両月の黒字幅は目だって縮小し、年初に比べれば半減するに至っている。また輸入の増大に伴う海運収支の悪化を主因に、貿易外収支もこのところ悪化の度合いを強めつつある点は見のがせない。

次に本年前半における国際収支の動向を概括してみると、貿易収支の黒字幅は、前年の818百万ドルから328百万ドルへと縮小し、また総合収支

では、前年の49百万ドルの黒字から490百万ドルの大幅赤字に逆転している。

6月の輸出は、前年同月比+8%と小幅の伸びにとどまったが、季節調整後の実勢では前月に比べ若干増加した。しかし、これは主として前月急減した船舶の引渡しが当月ほぼ例月並みの水準まで戻したことによるもので、これまでの伸び悩み基調がとくに改まったとはみられない。品目別(通関ベース)にみても、綿織物、鉄鋼、食料品(魚介類)等前年水準を下回ったままの状態が続いている品目も少なくない。もっとも、6月の輸出信用状は季節調整後で前月よりかなり増加した。品目別には鉄鋼が、地域別には米国向けがそれぞれ多少の増加を示したが、7月にはいつてからは再び伸び悩んでいる。

一方、6月の輸入は、前年同月比+30%とさらに増勢を強め、また、季節調整後の実勢でも一段と水準を高めている。これには、一時落着きをみせていた食料の輸入が当月相当増加したことも影響しているが、原燃料は総じて根強い増勢を続けており、また機械類や雑品目の輸入も増加基調を示している。メーカーの原材料在庫率は、石油業の定期修理に伴う原油の一時的消費減や、新規設備の稼働を控えた鉄鋼の在庫増など特殊な事情が響いてこのところかなり上昇しているが、全体として、当面輸入の反動減をもたらすほど在庫の積み増しが進んでいるとはみられない。現に、先行指標である輸入承認の動きをみても、原燃料を中心に引き続き高い伸びを示している。

(昭和42年8月1日)